◆視察の高校生「すごかった」 展示会場

○…農業機械の展示会場は来場者でにぎわい、メーカーの担当者と会話を弾ませる人や、記念撮影をする人、実際に機器に触ってみる人などさまざま。農業機械を扱う会社の仲間８人で青森県十和田市から訪れた三浦駿さん（26）は「トラクターに取り付けるアタッチメントの作業機を中心に見に来た。たくさん並んでいて見るのが楽しみ」と笑顔を見せた。

美幌高校農業科１年の今野勇介さん（16）は、授業の視察研修で級友ら約40人と来場。最新鋭のトラクターやハーベスターに「学校にあるものより大きく、構造も複雑ですごかった」と驚いていた。

◆半世紀以上前のトラクターも　特別展示

○…特別展示として注目を集めるのが、オールドトラクター保存会（茂古沼一会長、会員27人）によるクラシックトラクター展だ。1951年に製造されたドイツ製のホールドハンドトラクター（9.5馬力）など、半世紀以上前の農業機械を８台展示。茂古沼会長（80）＝音更＝は「新しい農業機械の礎となった原型の姿を、ぜひ見て懐かしんでほしい」と話す。

北海道150年を記念したパネル展も。北海道の名付け親として知られる松浦武四郎が残した「北海道国郡検討図」や記念碑の分布図など、大きな資料をパネルで展示し、来場者がじっくりと眺めていた。

無人トラクターによるパレードで華々しく開幕した国際農機展

【第34回国際農機展】「無人トラクター」一堂に　旋回自動化を実現　農機大手３社

2018年7月13日

第34回国際農業機械展ｉｎ帯広では、国内の大手農機メーカー３社がそろって「無人トラクター」を出展している。ＧＰＳ（全地球測位システム）情報を基に自動走行する既存製品の多くは、畝を移動する際の旋回を人間が操作する必要があった。無人トラクターは旋回も自動化でき、文字通り人間が乗らずに農作業できる構造となっている。

大手３社はヤンマー（大阪）、井関農機（愛媛）、クボタ（大阪）。あらかじめ設定された走行経路を、ＧＰＳ情報を基にたどる。使用者がトラクター外で監視しながら無人走行するほか、有人と無人のトラクター２台を近くで共同作業させる使い方を想定する。

ヤンマーが10月発売する無人トラクター「ＹＴ５１１３Ａ」は、今回の農機展が初めての展示。113馬力あり、「主に畑作での利用を見込んでいる」（ヤンマーアグリジャパンの江岸正利氏）。旋回時には、けん引する土耕機の作業も自動で中断する機能がある。使用者はタブレットで操作や動作の確認ができる。

井関農機は、年内発売予定の製品を参考出品した。60馬力で、主に水田や稲作での利用を見込む。直進走行に比べて、旋回時はステアリングをより大きく切る必要があり、自動化には高い技術が求められる。同社先端技術部の町田章紘氏は「来年度以降、畑作にも対応した大型製品の発売を検討している」と明かす。

クボタも有人監視下で無人運転ができ、昨年にモニター販売を始めた60馬力の製品を展示している。

人手不足や生産者の高齢化が進む中、国内農業の競争力を高めるには自動化技術の積極的な活用が避けられない。各社は今後も技術開発を加速する見通しだ。

国内農機大手３社が出展した無人トラクター。写真左からヤンマー、井関農機、クボタの製品